

集団的意思決定における個人の態度及び心理的ストレスとパーソナリティとの関係

1220480 杉山 颯

指導教員 上村 浩

研究背景

私たち人間の大多数は、集団である特定の組織（例えば企業や学校）に帰属しており、集団内での行動において、各個人が意思決定をしながら生活している。私たちの意思決定には、同調行動や帰属意識などが関係しており、これらの影響による個人が抱く心理的ストレスを明らかにされていない。また個人のパーソナリティと個人の意思決定（態度）の関係性を特定できれば、集団における意思決定の質が高まる可能性がある。

研究目的

本研究では、集団行動における個人の意思決定（態度）による心理的ストレスを測定する。また5因子モデル（Five Factor Model）における個人の性格を測定することによって、個人の意思決定（態度）と性格との関係性を明らかにすることを目的とした。

調査・分析方法

本研究では集団を設定し、その集団内で重要な判断・意思決定を行う過程において、個人の意思決定を4つの項目（態度）から認識し、心理的ストレス及び、5因子モデルを測定する質問を用意した。測定方法は質問ごとに平均値を算出し分析を行った。

分析結果

集団の意思決定において「集団における意思決定に一切の関与を示さないことが多い個人（帰属意識の低い個人）」は、心理的ストレスを多く抱える傾向にあった。また「第三の動機に基づく同調行動を行う個人」との比較により、前者の外向性が低いことが認められた。

考察・結論

本研究結果より、「集団の意思決定において一切の関与を示さないことが多い個人」は心理的ストレスを多く抱える傾向にある。また外向性の因子に関しても、「第三の動機に基づく同調行動を行う個人」と比較すると低いことが認められた。

次に「第三の動機に基づく同調行動を伴う個人」は、心理的ストレスを抱えており、協調性の因子が高くなる傾向にあると予想したが、これを支持する結果は得られなかった。また、個人の意思決定と性格との関係性を明確にするために分析を行ったが、これについても支持する結果は得られなかった。